

「否」の文学：『琉大文学』の航跡

鹿野, 政直 / KANO, Masanao

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

1986-03-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002759>

「否」の文学

—「琉大文学」の航跡—

鹿野政直

否^シ 一切の圧迫に対する人びとの答え
否^シ 一切の権力に対する人類^{ヒト}の拒否

新川明「みなしごの歌」一九五四年九月

はじめに

- 1 死の影を背負って
- 2 自立する批評
- 3 繫がれた島の凝視
- 4 主体への回帰

はじめに

大江健三郎のエッセーをつうじてふれていた新川明の姿が、脳裡に焼きつけられたのは、『反国家の宛区』（現代評論社、一九七一年）、『異族と天皇の国家』（百社、一九七三年）という、一九七〇年代初頭に彼が相ついで出した著書によってである。おどろおどろしい書名をもつこれら二冊の本は、「国家」にこだわり抜きつつ、沖繩にとって日本がなんであつたかとの問いを突きつけていた。私は、異相の日本近代史としてそれを読み、異相であることによってもつつよい衝撃力にたじろいだ。

戦後沖繩を代表する思想家の一人と目されるその新川明の、出発点へとさかのぼると、一九五三年に創刊の『琉大文学』にゆきつく。その『琉大文学』の名は、はやくから伝説的なひびきをおびて語られていた。発行部数が第八号で五百部にすぎなかった雑誌、大学生たちの同人誌といつてもよい雑誌、定期刊行を志しながら不定期が常態だつた雑誌、さしてみるべき小説・詩歌を生みださなかつたとされる雑誌、それでいて『琉大文学』は、その名を知るほどの大抵のひとつから、一種の畏敬をこめて語られる雑誌との観があつた。

その理由は二つある、と私には読みとれる。

一つはいうまでもなく、この雑誌に結集した人びとが、状況にたいして示した姿勢のゆえである。その場合に状況とは、基本的な枠組としての、異国の軍政下におかれた地域というにとどまらず、そ

のもとでの沖繩の精神状況、文学状況、世代状況、さらに参加者たちみずからの内面の状況などのすべてを意味する。

政治的状況とのかかわりについては、さしあたり大江のエッセー中のつぎの一節が、要をえた紹介となろう。「沖繩の民衆の戦後はじめての、総合的な抵抗運動であつた一九五六年の土地問題闘争において、琉球大学の学生が六名、退学処分をうけ一名が謹慎処分を受けたが、『琉大文学』はそのうちの四名を同人につらねているところの、そのような雑誌であつた」（『沖繩ノート』、岩波書店、一九七〇年）。しかも『琉大文学』は、そうした志を、基本的には政治的プロパガンダとしてでなく、みずからの主体をくぐらせ、しばしばみずからの腐蝕をもみつめつつ、文学上の営為として達成しようとした。そこにこの雑誌の、戦後沖繩史において消すことのできない存在感の根拠がある。

いま一つは、『琉大文学』が戦後沖繩の文化領域にさまざまな刺激的な発言をつづける人びとを輩出させたゆえである。新川をはじめとして、川満信一・岡本恵徳・豊川善一・嶺井政和・喜舎場朝順・崎原盛秀・儀間進・伊礼孝・中里友豪・岡本定勝・平山良明・幸喜良秀・清田政信・松原伸彦・又吉真吉・田中真人等々と列挙するとき、彼等がそのまま、戦後沖繩を思想面文化面で代表するとはもとよりいえないにせよ、戦後沖繩の思想や文化を論じるとき、彼等を抜きにしては語れないこともまた、事実である。『琉大文学』は、そういう彼等の思想形成と自己表現の場であつた。

いや、「であつた」と過去形で示すのは、おそろくふさわしくない。かつてのメンバーたちは概して

巻号	発行年月日	編集者	発行主体	頁数 A5判	巻頭言	備考
二巻〇号	一九六〇、一、二六	松原伸彦・城原啓司 ふくむらたけし 福地恒夫	琉球大学 文芸部	七四		事実上停刊
三巻一号	一九六一、三、一	譜久村毅・我那覇好成 当山寛彦	"	七六		
"二"	一九六二、六、二五	譜久村毅・松原伸彦 中里房江	"	五〇		
"三"	一三、一	田中真人・又吉真吉 譜久村毅	"	五八		
"四"	一九六三、一、二〇	桑江良昭・又吉真吉	"	五七		
"五"	一九六四、一、一〇	又吉真吉・譜久村勝男	"	五八		
"六"	一九六六、二、七	又吉真吉・田中真人	"	五二		
"七"	一三、三	田中真人	"	七二		
"八"	一九六七、三、一	田中真人	"	五五		
"九"	一九六九、五、三〇	嘉手納昇・小谷良宣	"	三二		
"一〇"	一九七一、六、五	松元憲雄・西銘郁和 松元憲雄・仲元盛郎	"	七二		
四巻一号	九、	松元憲雄・仲元盛郎	"	一〇六		
"二"	一九七四、八、二四	当間真栄・松元憲雄	"	三六		
"三"	一九七六、六、三〇	当間真栄・奥原進	"	三七		

*「巻号」の表記は、第二巻第一号から、第何巻第何号のように定着するが、それ以前は、「創刊号」「第二号」

「6」「7号」とあるように、統一した体裁をもっていない。ここではすべて、何号または何巻何号と表示した。

*「発行年月日」は、奥付の表記による。

*「編集者」は、一号〜五号の奥付の表記で、以下、六号は「編輯者」、七〜九号は「編集責任」、一〇号以降

「編集責任」となる。ペンネームも多く、原部次は本名松原清吉、新井暁は新川明、川瀬信（伸）は川瀬信一、

松島弥須子は松島康子、池沢聡は岡本恵徳、畑井正は畑井政和、河西門太は豊川善一である。

*「巻頭言」の名称は一〜五号のみで、六号〜二巻五号には名称が消え、事実上巻頭言の位置を占める言葉が置かれる。二巻六号以降はそれも消える。

すなわち『琉大文学』は、一九五三年七月二十三日に創刊号をだし、七六年六月三十日に四巻三号をだしたまま、とだえてしまった雑誌である。二十三年間に合計三十三冊をだしたことになる。^{*}編集責任者は、三巻七〜八号の場合を例外として、二〜四人から成り、在学期間を反映して、おおむね二〜三号で交代しつつ受けつがれている。発行主体は、当初、琉大文芸クラブであったが、四号発行のさいから琉球大学文芸部と称された（のち三巻三号で、組織の拡大をめざして琉大文学会への改組を呼びかけたが、成功しなかった）。部員の人数も、いまとなつては明確でなく、創刊号に名前のみえる人びと（明らかに外部からの寄稿者をのぞいて十人）が、当初のメンバーではなかったろうかという。正式に名簿があったのではなく、集まってくればメンバーとなり、去れば消えるというものであったらしい（新川明、川瀬信一、岡本恵徳各氏談）。刊行期間をつうじて、八号、二巻一号、二巻一〇号と三度の受難を

経験している。「琉大文学」にみえる記述を借用すれば、八号の場合、発送後「手もとにあった六十部と書店に依託した幾冊かが当局から回収され」（川瀬信「一歩前進しよう」、九号）、二巻一号の場合、「一学期間の休刊処分ともからんで（中略）、文学外の障害のために止むなき状態を見送らねばならず」（二巻二号の「編集後記」）、二巻一〇号の場合、「昨年（一九六〇年―引用者）の十・二〇事件、今年（一九六一年）の五・一七事件と言ふ政治的な事件を境いとして、この琉大文学が事実上停刊の状態に」おかれたとある（座談会「沖繩における文学と政治の状況」での司会松原伸彦の発言、三巻一号）。

* 費用は、ほとんどもっぱら広告によってまかなわれた。広告媒体もあまり多くなかったうえ、学生の企てだというので、広告主たちは割合に好意的だった。大学からの補助はなかったという（川瀬信「氏談」）。

文学思想史という枠組を設定する場合、外見上ほぼこうした足どりを示す「琉大文学」は、どのような意識をもちこみ、どのような問題を提起していったらうか*。

* もっともここでは、残念ながら、参加者一人一人とその作品についての精密な追求を行なうことはできない。こゝでなしうるのは、さまざまな個性からなる文学運動集団の、基本的と思われる足どりを、私なりに抽出することにとどまる。

一 死の影を背負って

『琉大文学』の創刊についてのべようとすると、新川明の存在は欠かせない。それを企てた人物だったからである。その新川は、新崎盛暉との対談「沖繩にとって△復帰▽とは何だったか」（『世界』一九八五年六月号）で、珍しくみずからの青春の位置づけを、きわめて概括的ながらも行なっている。それによると、一九五〇年、創立当初の琉球大学入学生（英語科専攻と、「琉球大学便覧」（一九五〇年、琉球大学図書館蔵）にみえる）となった彼は、「米軍支配下の抑圧の中で、学生生活をしていて、米支配に反発していくうちに、いわゆる『沖繩問題』に出合っていた」とある。もう少し具体的にいえば、「その頃米国留学や日本留学というのがあってね」、「結局、一度日留の試験に落ち」、そのうち『琉大文学』を創刊して、いわば文学の方へのめり込んでいくのである。

いかにもさらりと語られているのだが、八重山で敗戦を迎え、「敗けたと聞いて、もう悔しくて、いずれ大人になったら敵をうってやる」と思ったこの一九三一年生れの「軍国少年」は、その翌年に沖縄本島へ引きあげ、コザ高等学校をへて大学に入るまでに、「米軍支配下の抑圧」について、十分すぎるほどの体験を、おそらくはもっていた。しかも入学した琉球大学は、「布令大学」の異称がつきまとう大学であった。深い鬱屈が彼を捉えずにはいなかった。そうした抑圧を全身で撥ね返そうとの気魄が、おのずから外にあらわれたのであろう、彼は、髪を長くのばし、からだより大きい米軍放出のHBT（野戦服）を着て、いつも肩を怒らせ揺すりつつ、キャンパスを歩いていた。こう私に語ってくれた岡本恵徳は、新川の二級下の学生だったが、それだけに、雑誌を創刊するからと誘われたときあまりにはげしい人なのでこわかったし、また気どりたいする一種の反撥もあった、と付言した。

『琉大文学』は、若者たちのそういう鬱屈をのせて船出する。主導者は、新川と、その同級の松原清吉と、二級下の川満信一であった。

川満信一についていえば、生計費と学費をかせぎながらの、宮古での高校生活のなかで、図書館の焼けのこった蔵書にふれて文学に耽溺し、「自分の感受性が、詩のかたちで表現を整えていく面白さを体験し、嬉々として、何篇かの詩らしきものを書いていた(『川満信一詩集 一九五三―一九七二年』「オリジナル企画、一九七七年」への「あとがき」)。それが火種となって、琉大で同じ寮の新川からさわれ、『琉大文学』に参加する。そのころの心象風景を、彼はつぎのように自記する。「琉大に入学してからも、那覇軍港での夜間荷役、牧港米軍冷凍庫内の荷役、民間材木屋での材木運びなど、アルバイトの連続であった。ひどく辛くて、ガープ川沿いの屋台で、泡盛をガブ飲みし、深夜、寄宿舎へ帰って、ぶつぶつ独り言をいいながら、涙をかみこころしていると、すぐ隣りに寝台を並べている、当時、無頼の徒であった新川明から、クソッタルブッコソッタルデー」と威嚇されたりした。やはり同じ棟に、吉川ヒデオという先輩がいて、短歌を書いていたが、そのひとが、ぼくのノートを、たまたまみて、一緒に雑誌つくろうや、ということになり、ガリ版刷りで『琉大文芸』創刊号を出した。そのあとから正式な文芸クラブを発足させようということになり、松原清吉、新川明らが中心になって、現在に到る『琉大文学』の創刊号が発刊された(同上、ただし『琉大文芸』は思いちがいで、『龍樋』が正しい誌名だったと、川満氏は語ってくれた)。

創刊当初の数字を特徴づけるのは、若者たちをおおう死の濃い影である。すでに俄間進「受け継がれた負債——私たちの誤は何処にあったか——」(二巻三号)に指摘されているように、揆を一にしてとしかいいようのないほど死ことに自殺が主題として並ぶ。

創刊号と三号所載の八篇の小説のうち、七篇までが死を主題とし、しかもそのうち一篇をのぞく六篇が、主人公の自殺への歩みを描いている。そこに自己劇化や自己陶醉がなかったわけではないにせよ、自己破壊への狂暴な意志が、彼等の心奥に渦まいていたことは否定すべくもない。なにが彼等をそこに駆りたてたのだろうか。

原龍次(『松原清吉』「病床日記」(一号)には、これらの若者たちが置かれ見聞せざるをえなかった現実を、かいまみさせてくれる叙述がある。この作品は、気がついてみると病院のベッドに寝かされていた主人公が、まわりの患者や自分を、「生に執着する者の哀れな姿」と冷眼視しつつ、「人生の敗北者」になったとの想にとりつかれ、自殺へ傾斜するにいたるといっただけの筋のものが、入院先として胡差中央病院を設定したのが、構成上の特色となっている。友人Sに知らせるといっかたちで、作者はこの街の情景を描写する。その一節に、「外人に寄生して生きている女共がまるで、ウジ虫の様にウヨウヨしているのも此の胡差の街だ」。

基地の街の描写として常套的といふべきこの指摘を軸として、作者は、二つの方向へと思索をくりひろげる。一つは、「沖繩人は、本能的に奴隷的根性を多分に、もっているらしい」との感想であった。

そこには、彼女たちと自己を切りはなすのでなく、彼女たちを、自己を含めての沖繩人の典型と捉える視点がある。いま一つは、肉体を売ることと肉親の生活を支えるこの人びとこそ、「彼女(たち→引用者)らしい人生観を樹て、見事に生活している」との感想であった。そこにこそ本当の生活があるとの発見は、みずからもそのなかに属する知識人の生活を、かえって仮偽とする自意識にみちびく。それらからたぐり寄せられる彼女たちへの同質感と異質感は、主人公を二重に無力感へと突きおとす。しかもコザは、沖繩の例外でなく、逆に縮図であった。その結果として主人公の思索は、「幾ら観察を進めたところで、行きつく所は矢張り他力本願で生きる人達のみじめさ」という認識に帰着する。「病床日記」の作者は、習作という形容があてはまるこの作品に、そういう状況へのやりきれなさを託した。

そのようなやりきれなさを基盤とする死の主題化は、無力感のゆきつく先としての意味をもった。岡本恵徳によれば、接しうるようになっていた日本の戦後文学のなかで、同人たちには、太宰治の影響力がきわだつて強かったという(同氏談)。同時に死の主題化は、現実への拒否を貫徹しようとの意志の所産でもあった。つまり、自己否定というかたちをとる自己貫徹との意味をもった。原のべつ作品「運命」(二号)に、自殺者Sの遺書として、「地獄の底で自由を求め度い」とあるのは、ほぼそれにあたる。同人たちは、死の主題化によって、無力感と拒否感とのはざまにゆれる存在としての自己を、形象化したのである。^{*}

^{*} 詩上で小説と並ぶ位置を占める詩には、死の主題化は比較的に少なく、秩序の壁へ、ドンキホーテ的な突撃をこころみた作品が、むしろ目立つ。完結した言葉の世界を造型しやすい詩の特色であった、といえるかも知れない。

こうして『琉大文学』は、一九五〇年代初期の、占領下の沖繩という状況に根ざす無力感と拒否感のはざまに、おのがじし位置を定め、思想と表現をきたえあげてゆくための場となった。創刊の企画者であるとともに、創刊当初、原龍次||松原清吉と並び「編集者」の役割を担った新井暁||新川明と、川瀬信||川満信一の作品に、そうした思想と表現の発酵するさまを一瞥しておきたい。

新川明も、小説「夕闇」(二号)、「暗い水」(三号)に示されるように、死の主題化という意識を共有していた。しかし彼の場合、それとともに目立つのは、みずからの拠点を「エゴイズム」に求めようとする姿勢であった。「夕闇」は、筆致も筋もギクシャクぶりのみいちじるしい小篇だが、「エゴイズム」と服毒死を描いている。そうして、その男に迫られて性関係をもった女性が、彼の手に一言も彼女への言及がないのを知って、みずからも「エゴイズム」として生きようとするところで終る。

エゴイストとして生きるのだと、まるで自分にいかかせるようなエゴイズムのこの強調は、その名も「エゴイストの詩」(一号)と題する作品に典型的にあらわれ、新川の「エゴイスト」ぶりの秘密をのぞかせてくれる。

独尊の気は昂ぶって

頑迷なまでに傲岸な魂はニヒルの底に沈潜した。

自嘲はオレのぎん持が許さない！

妥協はオレのエゴが拒むのだ！

ただ驕慢と自負のみに

一日一日を生きるのみー

周囲のすべてを拒もうとすれば、いやがうえにも「エゴイズム」にたてこもらざるをえないという図式が、そこにはある。放置しておけば「自嘲」や「妥協」へと傾きがちの秤を、せめて引きもどすため、新川は、一人でふんばって、「独尊」や「驕慢」や「自負」という分銅をつみ重ねようとする。

岡本恵徳がいう肩肘はった歩きぶりは、「エゴイズム」を拠り所とするそういう拒否の精神の、身体的表現であったといえるかも知れない。

その姿勢を貫くため、新川は、みずからの、やさしさ、に封印しようときえしていた。詩「心臓の裏の此処の方の」(三号)は、彼のそんな内奥を、いくらか持てあまし気味に、同時に、いくらか笑みを含む調子で打ちあける。

真夜中にふっと毛布を押しやって

起き上がり、小さく「お母さんお母さん」

と呼んでいると

心臓の裏の此処の方で

そんな俺を感傷主義だっってわらう奴がいるのだ。

「それから。それから。それから」と、つづいて新川はこうした「センチメンタリズム」の種を数えあげる。出口のみえないままに拒否の姿勢をおし通そうと、彼は、そのやわらかい感性にあえて鎧をまとわせる方向を、選びとろうとしていたのである。

川満信一の場合、おのが情念を、カンヴァスに原色で塗りたくるような手法をひっさげて登場した。

最初の作品「最後の舞踏」(二号)に、その特徴はすでにはっきり備わっている。

糜腐した大魚の臍ふ、

足にぬかつく黄色の死汁、

ぬれぬれの千円紙幣がへばりつく

それは

生命の腺を吸い尽くす

ダニだ

このように始まる三十八行にわたるこの詩には、「糜腐」、「臍ふ」、「死汁」、「流産」、「沼底」、「濁泥」、「ぬかつく」、「ぬれぬれの」、「へばりつく」、「ぶくぶくに」、「むくみ」等々、腐敗や腐臭を連想させる言葉が行列をなし、状況の総体は、この若者の心象をとおして、汚物と汚辱にまみれた世界

として描きだされる。「金は生き、人は……葬儀車を待つ」という想念、「時代は／首を貫抜く拘束の針金」で、人間は頭をじゅずのように繋がれているという想念、「逃走を試みる者」は、「自由」という名の死児を流産するという想念、しかしそれは人間を繋ぐ「鋼鉄の針金」をいったんは「たわませる」という想念、「レジスタンス」が「聖書につばを吐く」という想念、みずからを「背徳の児」と規定する想念、その「背徳の児」が、「デカダンの沼底」で、「金色の夢」や「鉛色の思想」を喰み、「真黒い、太陽」に向けて「飛躍を試みる」という想念、そのころろろがみじめに失敗して、「聖書の綴糸で首を絞め」られてゆくという想念、こうして「背徳の児」が死んだのちその屍体のうえで、「ピエロー」が笛を吹きつつ、「最後の『自由』、の曲を舞う」という想念が、つぎつぎにあらわれ、それらは、まるで「カット」カットのように、画面の連続と転換のダイナミズムをおびている。占領下での「自由」と「聖書」の欺瞞性を撃ち、時代を、それとは対極の、「拘束の針金」で目刺しのようになされた状態と捉え、そのもとの避けがたいデカダンスとレジスタンスを浮びあがらせ、しかも秩序の檻に撥ね返されるという現実を直視する思想が、そこには、自己破壊への抑えがたい衝動を基調として吐きだされていた。

もっともこのように謳う川満に、明確な政治意識があったとみるのは早計だろう。むしろ、筋道をたてて支配の矛盾を探り当てるだけの論理を、まだ持ちあわせず、みずからにのしかかる抑圧を、不当ななにかと意識しつつも、それがどこからきているかを見きわめないことに由来するいたたまれなさが、かえってより激烈に、こうした言葉をとびださせていったのであろう。「社会そのものがどういう方向へ動くのか、どこへ目的を設定していいのかわからない。それでいて奇妙に自分の内側にはエネルギーがあふれ、それをあつかいかねていた」(川満氏談)。だがそこからは、もっと直接的に、軍靴のものと沖繩を謳う境地へは一步でしかない。

草枯れた土は硝烟に汚れたま、
灰燼の上にて

新しい、又新しい砲台がたてられ。

に始まる「今日のカンヴァス」(四号)は、こうして書かれる。この詩には、かつて緑濃かった南の島が「硝煙」と「灰燼」にまみれ、しかも「白骨」も「野晒し」のままに、「新しい砲台」が建てられてゆくとのイメージが、絶望を基調に謳いこめられている。つぎの五号に寄せた小説「流れ木」は、その延長線上に書かれることとなる。

シベリアからの復員兵である主人公の佳三は、一変した風景のなかにようやく故郷の村への道を探しあてるが、すでに村はなく、「村へ入る手前に二米に近い高さの金網が張り廻されて、OFF LIMITS」と書いた立札が立て、ある「ばかり、シヨックのあまり、母は？ 妻は？ と思わず金網にすがると、「米兵のガードがやってきて銃を突きつけ、ゲラアウェイ」と叫ぶ。「故郷の土なのだ。だのにシベリアの凍てついた氷原を踏むような感じだ」との想いに囚われた佳三は、金網に背を向けつつ、こ

うつぶやく。「戦争は終わっていない。俺はまだ捕虜なのだ。この島に住む他の連中も皆、待遇の良い捕虜生活を営んでいるのではあるまいか」。

それが、新川明や川満信一の出発点からの歩みであった。「エゴイズム」や「デカダンス」や「レジスタンス」などなんらかの支柱をみいだそうとすることによって彼等は、死や絶望からの漸次的な旋回を行ない始めている。心象風景の作品化によって、みずからの位置を確かめつつの歩みであった。そうしてこうした歩みは、『琉大文学』同人の多くにとっても道標となっていたと受けとれる。「吾吾の沖繩に於ける真の新しい文学は現沖繩の時勢を背景とした歴史的必然のなかにこそ生れて来なくてはならない」という、三号の「編集後記」は、その決意表明であった。

2 自立する批評

『琉大文学』の歴史をかえりみるほどのひとは、一様に、その真の出発が六号からだと言張する。二巻二号は、前号が発売禁止・部活動停止、つづいて主要メンバー退学の処分を受けたのち、十三カ月ぶりに刊行された号であるが、「琉大文学への批判」という小特集をくみ、大城立裕「主体的な再出発を」、池田和「認識」「実感」「形象」という二本のエッセーをのせて、再出発にあたっての自己検討の素材とした。そのなかで大城は、「創刊から五号までの行きかたと六号以降の転換」といい、池田は、「本格的な歩みは六号から」とのべて、いずれも六号を画期としている。

この評価は、同人たちのあいだでもほぼ共通の認識となっている。沖繩の「文化と思想の総合誌」たる『新沖繩文学』三五号（一九七七年五月）は、「沖繩の戦後文学」という特集をくんだが、そのなかで「五〇年代後半の文学活動」を語った中里友豪は、「五四年の六号の転換」を『琉大文学』の第一の「変わり目」とし、また討議「沖繩の戦後文学と演劇」に出席した新川明は、「それらの質的転換」と発言している。いや、それらの言をまつまでもなく、「転換」は、当事者たちによってつよく意識されつつ推し進められた。六号の「同人室」に寄せた新井暁の短文中の、「一応自省すべき時季に来た」との一句は、そうした決意を明示する。

六号が転換期といわれるのは、これまで指摘されてきたように、六、七、八号とつづけて、沖繩の戦後文学史にのこる評論が発表されたからである。いうまでもなく、六号の、新井暁「船越義彰試論―その私小説的態度と性格について―」と川瀬信「『塵境』論」、七号の、新川明「戦後沖繩文学批判ノート―新世代の希むもの―」と川瀬信「沖繩文学の課題」および八号の、北谷太郎（＝新川明）「われわれの内部の問題」と川瀬伸（＝川満信一）「この頃おもうこと」が、それである。牽引車としての新川明と川満信一の、ずばぬけた力量を知るに足る評論である。

「転換」が進行するなかに、それがもつ意味をもっとも整理して語ったのは、川満信一である（七号の「同人雑記」に寄せた短文）。彼の言葉で論旨をたどると、ほぼつぎのようになる。「大方芸術至上主義的な意図のもとに、琉大文学は創刊された」、「あの頃私達を魅惑したのはボードレールの『悪の華』

であり、コクトオの『阿片』であった。「五号出版の当りから作品の社会的広がりという漠然とした言葉を使うようになった」、「五四年新学期、この頃から各々経済学の勉強などを始める」、「文学書と併行して歴史、社会学関係の書を買ひ求めるようになったのもその頃だ」、「その意味で六号は新しいリアリズムを眼を開かれた私の出発であった。誌面ではそれだけしか親えないが、『琉大文学』の同人たちは、こうした文学活動だけにとどまらず、政治闘争にも参加するようになった。「経済」学の勉強は彼等を「政治」に開眼させたのである。「読書会でマルクスの階級史観を学ぶと、急に世の中がなにかもわかったような、妙な気持を味わった。そうして一ぱしのオルグ気どりになった」（川満氏談）。一九五五年の、武力による米軍の土地接収へのたたかいとしての伊佐浜闘争が、いまもとても明瞭に、その脳裡に息づいている。「時代の暗澹とした重さをくぐる過程で（中略）、なかでも伊佐浜土地闘争で、米軍の銃尾板で打ちのめされた体験は、ばくの行為に、ある方角の矢印を刻みつけた」（川満信「詩集」への「あとがき」。その想いのせいか、『沖繩大百科事典』における「伊佐浜土地闘争」の執筆者は、川満である。C.I.Cの眼をおそれながらの活動にも、彼等の幾人もが入っていた。

当事者の意識のうえでほこのようになされた「転換」は、ふつう、芸術至上主義から社会主義リアリズムへのそれと捉えられ、一応は前進と認められつつも正負両面をもって評価される（大城と池田の前掲論文参照）。

けれどもこれまでみてきたところから明らかのように、六号を軸とする「転換」は、突発的に行なわれたのではなかった。「死」の想念から出発して「壁」の認識へと歩んだ同人たちが、必然的に探りあてた突破口であった。もとよりそこに、彼等が自認するように、新川の場合は「詩学」や「荒地」、川満の場合は竹内好などという、日本の文学者や文学動向の影響がなかったわけではない。彼等のそうした関心は、概括的にいえば、ほぼ一貫して強くさえあった。とはいうものの、五号までの模索ないし悪戦苦闘という主体的条件あってはじめて、殻を破って六号が生みだされたことは、否定しうべくもない。その六、七号で同人たちが獲得した地歩とはなんであったか。

新川明と川満信一がくつわを並べて打ちだした「船越義彰試論」と「塵境」論は、ともに沖繩の現役「先輩」作家を祖上にのせ、手きびしく批判したところに最大の特徴がある。船越義彰は、一九二六年に那覇市に生れた作家・詩人、一九五九年の『船越義彰詩集』（南陽印刷所刊）は、「戦後はじめて刊行された本格的な個人詩集」という（大湾雅常執筆「船越義彰詩集」、『沖繩大百科事典』下）。また『塵境』の作者は山里永吉、一九〇二年に当時の那覇区に生れ、戦前から小説や戯曲にモダニズムの作風をもって活躍し、三三年に上梓した『山里永吉集』（新屋堂書房）は、「当時の沖繩文学活動の状況を示すもの」と評価される（岡本恵徳執筆「山里永吉集」、同上）。当時から新聞小説の名うての書き手の一人ともいわれ、『塵境』も、もともと『琉球新報』の連載小説で、一九五三年、琉球新報出版社から刊行された作品である。つよい郷党意識と相互扶助性に支えられる長幼の序が、若輩にとって言挙げしにくい雰囲気をかたちづくっているなかで、彼等があえてその禁を破る挙にでたのは、やや大げさ

に言えば、沖縄の文化的風土の総体への挑戦であった。

「船越義彰試論」は、「戦後沖縄の詩壇で代表的位置にある船越氏の作品と態度を分析し、考察する事によって現在の吾々の詩作の態度の反省を試みよう」とした作品である。新川はそこで、船越を、「感性による内面深化を計り、心境的個人感情を内向的にうたう」「純じょ情詩人」と位置づけ、彼の「私だけのよるこびや悲しみだけで手一杯」との言葉を捉えて、「私小説的」「逃避的」態度ときめつける。しかし新川にとっては、真の問題はその先、つまり沖縄では「技法的にも、詩美的な面でも、(中略)『じょ情派』が優れて」おり、そういう船越が「現在の沖縄詩壇の代表的存在を占めている」事実にあった。こうして新川は、たぶんに苛立ちをもつて、精神の病巣を剔抉しようとする。その図式は比較的簡単で、「すべて新しい時代の詩歌精神」が、「前時代のそれへの反撥乃至は更新を旨指し」ながら、「遂にことごとく、あの『日本的なもの』へと回帰していった」のはなぜか、と問うにある。この「日本的なもの」とは、「西欧のそのように自我形成ではなくて、自我放擲にな」る精神の形態とも表現されている。

この図式には、新川の「エゴイズム」論の痕跡がみられるとともに、「自我」志向や「西欧」典型説などを捉えて、彼の議論をあげつらうことはむずかしくない。また船越の、喪われた過去への想いの深さを総否定すべきでもないだろう。だが彼には、みずからをも含め浸っている沖縄の文学状況が、一刻も堪えられなかったのだ。そこに発する総否定こそ、この評論の核心であった。船越の作品が時と

して「まとまりすぎている」ことさえ、新川を「権威・破壊への衝動にいだない、「比喩」「隠喻」「抽象」「歪形」への嗜好を培った。こうして彼は、尖った語調で否定の思想を投げつける。「従来」の態度の否定と、新しい文学の創造こそ重大な課題ではなかるうか、「はげしい批評精神なくして何の詩人だろう」。こうした切迫感の根柢には、いうまでもなく新川の受けとめた沖縄の現実があった。その現実をのぞきみつつ、それだけに彼はこう付言する。「この特殊な状態、事情が続く限り、吾々の文学の可能性は極度に狭められた一定の限界の中にしか有り得ないし、今日の沖縄に於いては、そのような限界を越える試みは、生活の剝奪をさえ意味しなくはない」、だが、「現状に安易に背反したり、無関心を装ったりすることは、少くとも詩人の責任としても許せないのではなかるうか」*。

* 念のためのべれば、新川はもとより、プロバガンダとしての詩を提案しているわけではない。「僕としてもプロバガンダ詩やそんな(通俗的な意味での)引用者)抵抗詩には全然反対である」。

つづく『塵境』論は、「戦後沖縄文学の最高峰」との謳い文句で売りだされたこの作品を、「風俗小説」いや「真の風俗小説」から遠い「通俗小説」にすぎない、ときめつけた評論である。冒頭部分の敷衍が、すでに結論を提示する。「凡そ文学などと仮りにも銘うたれるべき代物ではない」、「何故、もっと『塵境』らしい沖縄の戦後に於ける社会の真実の姿を写してくれなかったのか」。実際、貿易会社社長となった真和志伝助、ヴィナス美容院に集まる有閑マダム、琉球政府の課長屋比久宗福といった人びとの織りなす風俗模様が、この小説のすべてといつてよい。川満は、そこに示された作者

の「無思想と怠惰な不誠実」を、まず問うたのである。「この作品に現れる人物なるものが、一人として戦争を体験していない」、「一体作者は戦争中河童の国に眠っていたのか?」。あまりにすばやい忘却と適応へのプロテストは、果てしなくとの観さえもって続いている。

こういう風俗模様を眺める琉大生川満信一の暮しはといえば、寄宿舎である「すきま風の吹くポロのコンセットの中で、朝起きますと下駄をつっかけ、タオルを腰にぶら下げて、掘井戸に集まり、つるべで水を汲んで洗面したもので」、朝食には、「三角定規型の平ぺったいパン」と「粉ミルクを水みたいにうすめたのをコップ一杯あてがわれ」、「昼食は、たくさん石粒の入ったポロポロのジャワ米で」、「テーブルに落としても飯粒はくっつかないでころころ転がり回っ」た。周囲はみな同じような生活で、さらに川満自身、「宮古から那覇へ出てきて、むこうで保たれていた濃密な村落的共同性の感覚」が、「ブツと切れたようになかった」で、「戸惑いの日常感覚のなかにあった(川満信一「政治と文学のはざま」、「新沖縄文学」三五号)。そこからみると、『塵境』の世界は、たとい現象として沖縄社会の一隅に存在しえたにせよ、百パーセント仮偽なるものと認識されたのであつたらう。

そのうえ川満にとって堪えがたいのは、この作品のはなはなしい登場にもかかわらず、「幼な馴染」からの「情実批評」がぼつんとあらわれたくらいで、「文壇には一累の微風だにない」ことであつた。

「通俗小説の前に一人残らず隷属してしまったのだろうか」との痛烈な言葉を、彼は文壇の「大人」たちに投げつけ、そうした総否定を基礎として、「われらの文学」の発表を宣言する。「絶えず民衆の

新鮮な感性を察知し、文学的香りをもつ作品を通して、民衆の感性と作家の感性をふれ合せる所に民族の新しい文学は始められる」、「『塵境』などとは全く無縁の次元から沖縄の文学は始められねばならぬと思うのだ」。

文学に心の焰をもやす二人の若者が打ちだした議論は、ほぼ右のようなものであつた。どちらかといえば、新川は文学史の流れを拠り所として論を立て、他方、川満は状況と正面から向ひあつた。また前者は、懐旧趣味つまり現実からの逃避を批判し、後者は、風俗化つまり現実への「悪乗り」を糾弾した。そのように両者は、方法も対象も異にした。とはいえ、それによって彼等は、ひとしく、文学のありようにたいして総否定の旗を立てたのであつた。暢達とは対極の、舌足らずでとげとげしくさえある彼等の文体は、その場合の緊迫した内心を、少なくともある程度は反映している。そうしてそのような挑戦によって初めて、沖縄文壇の、おのずから定まっているようにみえた、「ヒエラルヒー」は、既成の、と意識されるにいたつたといえる。

と同時にそれは、沖縄文学史における評論の自立というべき意味をもった。歌謡に発する琉球文学は、近代になって伊波普猷いうところの「言語という七島灘」に苦しみつつも(寂泡君の為に「一九二四年、沖縄文学として一定の達成をなしとげてきた。しかし各分野にわたる戦前のその達成のうち、評論はもっとも実り薄い分野であつたと受けとれる。いちばんまとまった沖縄文学史と思われる岡本恵徳「近代沖縄文学史論」(『現代沖縄の文学と思想』所収)には、短歌・俳句・詩・小説・戯曲の五つの分野

が立てられているものの評論の項目はなく、わずかに伊波月城の一文が、「小説の分野における批評の最も早い現われ」として採りあげられているにすぎない。そういう文学状況のなかで、「船越義彰論」と「塵境」論は、あらたなジャンルの出現にひとしい、事件^{*}であった。そこに、怒れる若者たち^{*}の画期性があった。

批評の自立の衝撃波は、ただちに沖繩文壇に伝わった。編集部は、おおむねすぐ上の世代の文学者たちに向けて、「戦後沖繩文学の反省と課題」という主題でのアンケートをだし、回答を七号にまとめて掲載する。回答を寄せた八人のうち、太田良博・船越義彰・北村潤の三人までが、「批評の欠如」をいい、大城立裕・嘉陽安男の二人が、反省の対象とするほどの収穫があったかと問い、その他の冬山晃（『城間宗敏』・呉我春男・数田雨條らも、「新しいモラル」の提示、「中央エピソード」からの脱却、「生活」の直視をこども訴えたのは、その衝撃が広くはなくとも、いかに深かったかを示している。そのなかには苦言も含まれていたが、彼等は多かれ少なかれ、自己点検を迫られずにはいなかったのである。

そういう反響を背負いつつ、新川明と川満信一は、さらに評論の歩みをすすめる。七号所載の「戦後沖繩文学批判ノート」と「沖繩文学の課題」および八号所載の「われわれの内部の問題」と「この頃おもうこと」が、それにほかならず、そのなかで新川は、沖繩の戦後文学史の全面的な検討に立ち向い、川満は「沖繩の社会的現情」と文学の問題を省察した。

いったん踏みだした新川にとって、戦前からの「既成作家」たちは、もはや一顧だに値しなかった。彼は、彼等を一言のもとに斬りすてたうえで、戦後すぐに出発した作家たちから批判に値する作品を取り出し、それらを吟味しつつ、いまだ存在しない新しい文学へと途を探ろうとする。組上にのせられた作品群は、〔一〕沖繩タイムス社「鉄の暴風」（一九五〇年）、仲宗根政善「沖繩の悲劇」（一九五一年）、大田昌秀・外間守善「沖繩健児隊」（一九五三年）などのいわゆる戦争文学、〔二〕太田良博「黒ダイヤ」（一九四九年）、〔三〕城龍吉（『大城立裕』「老翁記」（一九四九年）、四冬山晃（『城間宗敏』「帰郷」（一九五〇年）である。新川は、〔一〕については、悲劇を強調するだけでは、「センチメンタリズムに擬装された陥穴」にはまるといい、日本占領期と降伏後のインドネシア少年との出会いを描いた〔二〕については、その少年と「私」との関係が「私的人間関係以上」になっていないと批判し、農村の知識人である父を主題とする〔三〕については、主人公の口をかりた「自虐、自棄、自嘲」気味の沖繩人批判に疑問をなげかけ、「虚無」の海にただよう沖繩人二世青年を採りあげた〔四〕については、「家」への反逆^{*}なく「逃避に身を委ね」た点を否定する。^{*}

* 一九四〇年代後半の沖繩の文学状況については、仲程昌徳「沖繩の戦後文芸・附作品一覧表―『うるま新報』一九四五年―一九五一年」〔琉球大学法文学部編刊「戦後沖繩における社会行動と意識の変動に関する研究」（一九八五年）所収〕が、示唆するところ多い。

* 太田・大城・城間の作品は、「新沖繩文学」三五号「特集・沖繩の戦後文学」に、あらたに作者の言葉を付して再録されている。

これらの論をつうじて新川は、社会の全構造とその矛盾を正面から照らしだすリアリズム文学を提唱したといつてよいだろう。その結果彼は、「過去へのノスタルジー」や、「旧態依然としたオペティミスト」ぶりや、さらに「エゴイストチックなベシミスト」ぶりを、すべて批判する立場を打ちたてたのである。そのエッセー中にみずから記すように、新川のこういう思想展開には、日本での国民文学論や、野間宏『真空地帯』、木下順二『夕鶴』などの作品や、刊行開始の『岩波 講座 文学』が、つよい影響を与えていた。そうした思想的風圧に引きずられながらも、この若者は、沖繩の文学と思想の、未来形におけるありようを示す地点へと抜けできることができた。同時にそれは、彼の個人史にそくしていえば、「エゴイスト」ぶりの強調によってかううじて、不服従の主体的条件を確保するのに忙しかった状態からの、新しい見晴台への到達であった。

日本の文学の動向からヒントをえようとの姿勢を、比較的強くもっていた新川と異なり、川満の場合、沖繩の文学について思いをこらせばこらすほど、どこにもモデルを求められない状況にあると痛感していた。「一体どんな文学を産み出すべきか、又どういうふうにしてどんな性格の文学運動が進められなければならないか。何とかしてその示唆を得たい」と思い、日本及び多国の種々雑多な文学理論書に我武者羅にぶつかって行くのだが、どの文学論もそのまま沖繩に於ける文学活動に当てはめられるものはない。なぜか。そこには「文学以前の問題」が大きく横たわっていたからである。その「文学以前の問題」とは、沖繩で、思想・言論の自由が大幅に制約を受けていたことを意味する。

「どんな事にもせよ、私達が話したり、書いたりする場合一言一句(中略)、自分の周囲を不安な目で見廻さなくてはならない現状」が、あったからである。『琉大文学』の場合、「顧問教授の認印と学生準則の規定の手続きを経、副学長の認可を得て出版」にいたるが(この引用のみ、川瀬信「一歩前進しよう」(九号)より)、そのうえUSCARへの三部ずつの献本が義務づけられていた(川満・岡本両氏談)。こうした文学外的強制力に加えて、同人たちはつねに、密告者を警戒しなければならなかったと今日、語られたりする。「真実が真実で通らなくなるところにおいて、真実を追究する者はたちまち破局の淵に追いこまれる」。

* 琉大当局による検閲については、少しのちのことになるが、学長安里源秀が、来学した立教新聞学会学生一行との会見の席上で、学生がわからの「琉大では、学生新聞の検閲をしているというが」との問いに答え、つぎのように説明している。「沖繩では、どんな出版物をするにも許可が必要である。それで学生新聞に学生としての自主性を欠いた見解を発表されるのを学生との話し合いで検討しようというものである」(「学生新聞は検閲する」安里琉大学長立大生に説明、「沖繩タイムス」一九五九年八月十八日)。

だが、こうした「文学以前の問題」は、所詮、沖繩の地位の一徴表にすぎない。こうして川満は、文学を論じようとして、沖繩の地位そのものを考察の対象とするにいたる。そのくだりで彼がくり返し行なう沖繩の地位についての規定は、文学を志すひと特有の感受性にみちて、みずから置かれている場の本質をあげます。いわく、「私達は一つの網にすくわれた魚群のような状態にある」。いわく、「生活の苦しさは、人々をして民主主義の憲章に謳歌される最後の基本的人権まで放棄させ、次第に

てきてない」(主体的な再出発を、「二巻二号」)。

同人たちは、こうした「眼高手低」ぶりから完全に免れていたわけではない。しかし評論はもとより小説や詩においても、掲げられた理念なくしてはかなわぬ新しい動きは、まごうかたなく起きつつあった。そうしてそれは、戦後沖繩思想史において、文学作品というかたちをとった見逃しえぬ一里塚をなしている。

評論の分野の新しい傾向として、二つの特徴を指摘することができる。

その一つは、伝統文化としての琉球文化への、関心の急速な高まりであった。それは、すでに六号の「編集部だより」にみえる。「吾々は既成の郷土芸術への新しい解釈と理解と批判によって、吾が郷土琉球に即した新しい芸術の創造を為さねばならぬ」。そうした編集方針を反映して同号には、中村龍人「琉歌研究の一考察——特にその長所について——」が掲載されており、また、間にあわなかったが山田有功に「おもろさうし」についての、安谷屋正義に紅型についての原稿を依頼してあったという。中村らは琉大の教員でそれぞれの分野の専門家であり、同人たちには、あらたな旅立ちにさいして、伝統文化についてのそれら専門家の蓄積を吸収しようとの姿勢が生れているのを、知ることができる。

そのようにして起きてきた伝統文化論を、もっともまとまったかたちで示しているのは、座談会「沖繩に於ける民族文化の伝統と継承」(九号)である。池沢聡(＝岡本惠徳)を司会とし、大城立裕・新川

明・玉栄清良・太田良博・川満信一(ほかに紙上参加として仲宗根政善・嘉陽安男)を参加者としたこの座談会で、大城・玉栄・太田ら「先輩」たちと新川・川満とのあいだには、あきらかに基本的立場の相違があった。大城と太田は、沖繩では「過去のものに絶対的な評価を置いて」、「犯すことの出来ない権威」として受け取られてきたという角度から、主題に迫ろうとし、玉栄は、「琉球文化には近代的性格と封建的性格の両面」があり、前者を受けつぐべきだと主張した。それらは、伝統に向いあう場合のそれぞれ一つの問題点の指摘ではあった。しかし新川と川満にとって伝統とは、「ある継承された文化遺産が唯一遺産であるだけにとどまらないで、そこに生きる人間の主体的な面に働きかけるエネルギーを内包して居るもの」でなければならなかった。そこには、主体にこだわらず、伝統を創造の契機たらしめてゆきたいとの姿勢が色濃くでている。その点は、座談会を司会した岡本惠徳によって、九号の「編集部便り」で明快に整理されている。いわく、「伝統がその民族の生き方の基定をなすものであり、創造主体に働らく創造の契機であるのならば、我々は此の問題からそれた位置で新しい創造を生み出すことは決して出来ない」。

いま一つは、方法としてのリアリズムへの志向であった。新川はそれを、かなり素朴にこうのべる。「『社会主義的リアリズム』というものがどのようなものであるか知らない。それをこれから勉強し、僕たちの芸術表現(詩や小説にしろ、批評にしろ)の強力な武器にしたい」(批評・その位置と態度 われわれの内部の問題」(三)、一〇号、筆名＝北谷太郎)。この言は大城立裕によって、知らないものを勉強して武

器にすると、批判されるのだが、「主体的な再出発を」と、そうじていえば、そこでめざされたりアリズムが、同人たちが状況をえぐりとうとうするとき「武器」となったことは疑えない。

同人たちの決意表明との位置を占める評論の新しい傾向は、このように伝統文化への関心とアリズムへの志向を二本の柱としていた。このうち前者は同人たちの主体意識に、また後者はその方法意識にかかわっている。こうした新しい傾向の出現に、少なくともある程度の「外発性」がなかったわけではない。また彼等の多くにとって、当為として打ちだされた気配もあった。伝統文化への関心の場合、琉歌にせよおもろにせよ紅型にせよ、その内部にひたるには、彼等は、一面ではあまりに稚く他面ではあまりにエリートであり、なによりも状況の苛烈さのゆえに、もっとなまなましい当面の課題へと衝き動かされがちであった。リアリズムへの志向の場合、目的意識が先行して、教条的な理解となる傾向をもった。とはいえ、この両者が重ねあわされるとき、そのリアリズムの手法は、しばしば自己切開の痛切さをおびて、状況を撃つにいたるのである。

「六号以後は部員みなよく勉強したものだ」(「われわれの内部の問題」)。新しい方向への踏みだしにともなう同人たちの、気持の昂揚をうかがわせる一句である。七号から、それを反映する作品——小説や詩が姿をみせはじめる。そうした視点が打ちたてられると、題材はいたるところにあった。同人たちの眼は、おのがじし状況へと向い、また、状況からさまざまの想いを運んできた。くりひろげられた主題はもとより多彩である。しかし沖繩の状況をみつめるとは、第一義的には、基地下の現実

をみつめること以外ではありえなかった。「期限なき占領国に生きをりて実弾演習の銃声に怯ゆ」(平山良明「二つの雲」、九号)、また、「訓練空襲警報！灯を消せ」と、和英両語でラジオは繰り返し告ぐ(宮城美智子「燈火管制」、二巻一号)という日常性のなかから、彼等はどうな作品を紡ぎだしたか。状況と思想が火花を散らしている達成として、私は、岡本恵徳の小説「空疎な回想」(七号、筆名〓池沢聡)、ぎます、む(〓ぎますすむ〓儀間進)の詩「ぎまじ」(七号)と「すすき」(八号)、そして新川明の二篇の長詩「みなし児」の歌(八号、筆名〓北谷太郎)と「有色人種」抄その一(二巻一号)をあげたい。

* 「その二」はついに書かれなかった。

「空疎な回想」は、アメリカ軍基地のガードを主人公にした作品である(のち「ガード」と改題して、「新日本文学」一九五五年九月号に転載)。それは、沖縄人としてもっとも直視したくない存在である。そこには、「どんな仕事でもあれ軍の作業に就けないことは暮しの道を絶たれることと同じ」という現実が、反映しているだけでなく、その職務が、住民の侵入、にたいして基地をまもるにあるという点で、人びとに二重の恥辱感をかきたてる。

主人公のガード研三の心境は、つぎのように描写される。深夜、「彼を支えて居る唯一のものは、肩にかけてあるカービンだけなのだ」。まもなく交代と思つたとたんにひびく銃声。発作的に、銃声のほうを振り向き、「俺だっただらどうする」。彼は、「南支那では、その手で何人も人間を殺害した」

兵士だったが、「ついぞ感じた事のない恐怖」に打たれる。「彼の監視区域であったなら、どうしても射殺しなければならなかったであらうことを、彼自身良く知って居る」。

ここで、侵入者を射殺したガードの行雄が登場する。「乱れた髪の毛が、脂汗で、蒼白な額に、くっついて居る」という恰好で。しばらく沈黙ののち、まるで「沈黙からのがれる様に」、迎える仲間から突如、「ヒーキンな声」が起きる。「イョーツ凱旋將軍」「殊勲甲ツ」。もとよりそこには、「緊張をほぐそうとする善意だけではない何ものか」が含まれていた。

だが、物語はつぎの展開をみせる。「日が経つにつれて、行雄は、彼自身の行為を正当化し、そして、苦痛を思い出さぬ時が多くなった」と同時に、周囲の空気も微妙に変化し、「皆は、行雄の正当化を是認する様になった」。「あれから頻繁になった銃声がそれを裏付け」た。そこで研三は翻然と悟る。「あの晩の行雄の銃声は、行雄の生活を保証した軍の声だったんだ」。そんな研三は、勤務中、おそわれて撲殺される。それを知った行雄は、「物の怪につかれた様に」叫びつづける。「彼奴ア馬鹿だッ、大馬鹿野郎だッ」。

島を閉じこめ島を手段化する占領体制のもとで、住民がどんな矛盾にさらされていたかが、この短篇には、みつめられている。もっとも顔をそむけたい局面を、作者は執拗に追いかけて、人間がどこまで墮ちるかどこかで踏みとどまれるかの問題をも提起した。と同時にこの作品は、みつめるといふ行為をとおして、こうした状況が情性化するかたちで心身に喰いいることに、拒否の意志を表明していた

のである。

もともと『琉大文学』にとくに親近感をもっていたわけでもない儀間進は、六号の評論に「ショック」を受け「道標」を示された気持となって、同人に加わった(儀間「前号のエッセイをめぐって」、二巻四号)。その彼は「ぎきじ」と「すすき」で、沖縄人の心境を二様の植物に託す。「ぎきじ」で彼は謳う。

葉っぱの色があんなに暗いのは

土と化した私達の祖先の肉を吸収したのだ

花があんなに白く、小さいのは

私達の祖先の骨を吸収したからなのだ

悲しみは匂となって、私の真赤な血液にしみ通る

たぶんこの詩には、二つのイメージが重なりあっている。一つは、あんなにも多くの血を吸った戦争への挽歌である。そうしていま一つは、そうした死者の「肉」や「骨」を「吸収」するぎきじの業である。それは、生きのこった沖縄人だれもの心に、寄せては返す想いであった。

死者を食って生きるぎきじの運命のあとにきたのは、すすきの運命であった。「すすき」にはこう謳

われている。

沃野から山野へと追いやられ、もうとっくの昔に撰択と言う事が略奪されてしまった。すすきは

こゝは砂地であるからと

こゝは岩石であるからと

ためらっては居れないのだ

どんなかたさの中にでもへばりついて根を生やす

莖は骨だけにやせそ^こってしまつて わずかの風に

さえゆらゆらと揺れるのだが 莖と莖は寄り集つて

根っこは、しっかり結びついて生きる

その葉は裂けちぎれていても その姿は頼りなげにみえても

八月の颱風をくぐり抜けていっせいにびっしりと花をつける

まるで伊波普猷のフヂツボ論(進化論より見たる沖縄の廃藩置県、一九〇九年)を髣髴とさせるこの詩は、撰択の余地のない状況を、主体的に捉え返そうとする姿勢を浮き彫りにした。

新川明の二篇の長詩は、若い日の彼の詩人としての力量を偲ばせる作品である。まず『みなし児』の歌』はこう始まる。

何ヶ月か こゝには破壊だけが生きていた。

正確に「死」を把える照準器

正確に「死」を刻む弾道

悉くの間は「死」のためにのみあった。

その呪い季節が去って十年

今日も亦爆音きこえる

そしてうっすらと硝煙が流れる。

詩は、こういう序詩につづいて、「若い男の独白」を軸としつつ、「闇の声」「合唱」「女の声」がそれに向いあうという詩劇ふうの構成をもって展開する。

「若い男の独白」は、失われた過去へと深く傾斜する心情をもって出発する。

嘗つてこの島の空も深かった

この島の海も深かった

だけど そうだ!

深かったのはこの空と海だけではなかった

山の緑も深かった 人々の情も深かった

それについて「闇の声」は、「過ぎた想い出をのみ 語ることをしてはいけない」と戒め、「合唱」

は、「すべての『生』のために／先ず生きねばならぬ」と謳い、「女の声」は、「私が死んだのは 恋人よ 愛のためではなかった／私の生命を奪ったのは一片の綿火薬だったのだ」と、現実を突きつける。こうしたやりとりの中に、「若い男」の胸底は過去から現実へゆっくり向き直ってゆき、それとともに、「独白」は「力強い声」に、ついで「声」は「力強い叫び」となる。その結果として、結びの「合唱」がくる。「低音で抑へつけたように」と注釈されたその「合唱」の基幹部分は、しばられた現実のなかで歩きつづける決意と、そうした現実を人間の名で拒否し抜く意志を示してあまるところがない。

俺達はただ 限られた空間をあてがわれ

俺達はただ 限られた時間をあたえられ

それ故歩きつづけねばならぬ

それ故厳粛な限定の中で 振り返えらねばならぬ

手を握り握りしめねばならぬ

否 一切の圧迫に対する人びとの答え

否 一切の権力に対する人類の拒否

が、それである。

これにたいして、いま一つの『『有色人種』抄』は、白い統治者のタブーに踏みこんだ作品である。

ぶよ ぶよと 産毛の生えた白い人種は

このボクらの島にオネスト・ジョンを運び込み

ボクらの主人面をして 島をのし歩く

白い人種は

ボクらのことを 黄色人種 と呼ぶ

ここにはさまざまの装置が仕掛けられている。まず、のし歩く新しい支配者を身近に目睹せざるをえない境遇に置かれた人びとの感覚が、表白されている。そのうえで彼等は、異国人というよりは異人種として捉えられる。レイシズムと紙一重のこの発想には、相手からむきだしのレイシズムを浴びせられていることへの、痛烈な復讐の心理が貯えられている。と同時に、異国として捉えるなら占領国と被占領地域として絶対化せざるをえない関係を、異人種との認識をおしだすことによって、白と黄という色彩の相違に還元する操作が行なわれる。さらに、西欧の世界制覇とともに定まった皮膚の色における美醜の序列を、くつがえそうとの主張が打ちだされる。そうしてそれらの幾重にも折り重なった心理のうえに、「主人面をして」の一句が、じつは彼等が仮の主人でしかないとの連想を誘い、白人神話にとどめをさす筋立てを作っている。そこには、状況を凝視するゆえの状況拒否への逆転パネが、

準備されているのである。

だが イエローで

ボクラはイエローで 沢山だ。

黄色人種で沢山だ。

混りッ気ない思いにつながる黄色人種だ。

抑圧される「黄色人種」とのこうした自覚は、統治者のなかの被差別層をなす黒人への注視となる。

キミたちの肌も白ではない

鉄のようにたくましい黒褐色だ。

消すことの出来ぬ幾条もの鞭痕を秘めた

敵のように頑丈な黒褐色だ。

この黒いキミたちと

黄色いボクラ。

有色人種のキミたちとボクラだ。

さらに新川はつぎのように呼びかける。

故郷を離れて

東洋フアイエーストの見知らぬ島に

駐留する占領者の従順な手下キミたち。

陽気にチューインガムを噛み

島の女たちとたわむれ

得意に街を闊歩するキミたち

(中略)

故郷ホームの町の公園のベンチに腰かけることも、

共に学校に出ることも許されない

長いしきたりの

皮膚が黒いという尊まさについて

だが、キミたちよ。

考えたことはあるのか。この黄色いボクラの前で。(傍点は原文)

占領期の記事や文学作品に目をさらすとき、「黒人兵」という表現にぶつかる場合が少なくない。そこには、ほとんど例外なく、ぶつうのアメリカ兵、でないとの感情が隠顕している。しかもそうした感情は、優等者としての、ぶつうのアメリカ兵、にすり寄ろうとの意識によってのみ生みだされたものではない。被占領者としての齟齬の通路を、占領者内部の被差別層に向けてみいだし、精神の慰藉

をえようとの想いにも支えられていた。だが、新川のこの詩の場合は、それらのいずれとも決然と異なっている。それは、抑圧者のなかの被抑圧層・被差別層にたいし、おなじ被抑圧者・被差別者としての論理と感情をこめて、連帯を呼びかけていた。そういう意思表示は、占領下の文学として初めての型であった。そのうえこの詩は、デモクラシーを自任する国家のもっとも弁明しにくい部分を痛撃したのである。それだけに統治者は、この詩に激烈な拒否反応を示す。二巻一号への発売禁止・半年間部活動停止の処分は、この「『有色人種』抄」を原因とした（新川明・詩、儀間比呂志・画『詩画集日本が見える』〔築地書館、一九八三年〕への岡本恵徳「解説」）。

占領下の沖繩・基地下の沖繩をみつめ、それへの哀しみと憤りが深まるほど、そのように奪われるまえ・失われるまえの沖繩の原像への思慕がつよまる。そこに胚胎する「ふるさと」のイメージは、こうしてこの時期の『琉大文学』にとって、いま一つの主題をかたちづかった。宮城妙子「ふるさとについて」(七号)、同上(八号)、「水のない川」(九号)、仲原英孝「ある夕暮れのふるさと」(二巻一号)、いれい・たかし「悲しい惑いの年(故里の惨さの度合について)」(二巻一号)などの詩は、その系列の作品である。すでに琉大をはなれていた新川明も、一九六〇年にまとめた儀間比呂志との共著『詩と版画 おきなわ』(改訂して前掲『詩画集日本が見える』)の「序章」を「古里」イメージで構成している。

その「ふるさと」イメージの全容がどんなものであったかは、宮城妙子の作品にもっともよくうか

がうことができる。彼女はまず、「ふるさとについて」で、「甘美なふるさとの／絵葉書のような／雰囲気」を主題とする。そこでは、自然とともに悠久の時をきざみつづけるかのような一家の一日が描きだされる。それは、

ふるさとはのどかな

夜明けがある

縁側の陽ざしで

祖母の白髪頭を

二人の孫がかきわけていた

に始まり、蝉しぐれの昼下り、ついで野良仕事から帰る夕暮をへて、

甘藷とよもぎ汁の

粗末な食卓が終る頃

裏山のフクロウは

深く安らかな人々の

眠りを誘って啼きつづける

にいたる一日である。だが、つづく(Ⅲ)では、一転して「ふるさと」は、台風と基地によってするどく

爪をたてられた姿をみせる。

為すことなくなつた村人は

「山は速くなるし

今度こそどんな世になるか」と

夕まぐれから酒をあおっている。

引き裂かれた「ふるさと」へのこうした想いは、人びとの意識共同体の源としての「言葉」や「神話」や「伝説」に向わずにはいられない。「水のない川」は、「ふるさと」思慕の必然の結果として、主題をそこにみいだした。

ほら あの畦道を下りて行ってごらん

ちり捨場のよにほいがするから

もうそこにはエビやカニはいない

いったい これはなんのことだろう

美しい神話と伝説を人々から奪い

ぶりかんの生活の言葉だけをのこして

表題の「水のない川」とは、「民族の言葉」を意味している。

犯された「ふるさと」を主題にすることによってこれらの詩は、いまを否認する姿勢をあらわにする。

こうした「ふるさと」思慕が、一九五〇年の後半、「琉大文学」同人たちにとどんなに共通の意識となっていたかは、二巻五号の巻頭詩にまぎれもない。そこに引かれたパブロ・ネルーダの詩は、「千度ちたひ死なねばならぬとしても／わたしは、ふるさとで 死にたい／千度ちたひ、生れるとしても／わたしは、ふるさとで 生れたい」であった。

* この「ふるさと」思慕は、本来の沖繩に回帰しようとの思想でありながら、日本「祖国」論と微妙に重なりあった。「琉大文学」は全体として、占領という鉄の環にいかんにかに文学的思想的に立ち向うかとの課題に、その存在を賭けており、「祖国」復帰運動とほとんど思想上のかかわりをもたなかった。そのなかで一九五〇年代後半は、それへの揺れ、が目立つ唯一の時期をなしている。二巻一号巻頭に、沖繩文学の会の、「祖国においてはふたゝび民主主義文学運動が建て直され」云々という「創立趣意書」をのせたこと、二巻一号／八号（一九五六―五九年）の奥付が、米軍支配への抵抗、として元号で書かれていたことなどが、その指標となる。思想的なリーダーであった新川明の、「みなし児の歌」の「みなし児」意識は、本土に捨てられた沖繩との想念を基底にもっていたし、また彼の「おきなわ」と「日本が見える」を比較しても、そのことはよくわかる。両書の「序章」の前半を引用すれば、あの日から／古里は南の海で／一匹の蛇になった。／蛇が 原子砲のうずきに痺れて／おどろ おどろと身悶えする時／古里に住めないばくたちは／祖国の街角に立って／猛け猛けしい鷹になり／南の空を睨む」が、「あの日から／古里は南の海で／一匹の蛇になった。／（一行あき）／蛇は／原子砲のうずきに痺れて／おどろ おどろ身悶え／古里に住めないばくたちは／渡りの季節を待つサシバのように／異郷の街角に立って／南の空を睨む」と、改稿されるにいたる。

4 主体への回帰

繋かれた島の凝視は、『疏大文学』同人たちにこのように、視野のあらたなひろがりをもたらした。と同時にその結果として、容赦のない現実、二巻一号への処分として降りかかった。その間の事情は、停刊状態の雑誌の再刊に奔走したぎます、むの「前号のエッセイをめぐる」(二巻四号)にも、ともくわしくのべられている。「顧問教授がいなくとクラブは成立しない」のに、その顧問教授が降りるといっただけばかりか、「更にプライス勧告に対する土地問題のさなかに、疏大から七名の処分学生(中三名の疏大文学編集責任者と部員一名を含む)を出し、ぼくたちの処分撤回の運動は実を結ばないまに学園には冷たい風が吹きすさんでいる困難な状況の中にあつた」。そのなかでの再刊運動は苦渋にみちたものだった。大学当局は「信頼する」どの言葉で、自主規制を求め、ぎまは、取り締まる当局に「信頼」されて果して「文学の批判性」を保てるかと思いなやむ。そんなあげくの再刊だったが、「再刊後はケンエツが嚴重になされた。ぼくたちの原稿は顧問教授学生課長、教務部長そして副学長の順を経て、認可されて始めて雑誌は発刊されるのである。その手続きを踏まなければならなかつた」。処分は、この一九五六年のいわゆる島ぐるみ闘争への占領軍の強圧の一端としての性格をもっていた。

『疏大文学』同人たちは、こういう状況を撥ね返し、どのようにあらたな出発の思想的基盤をかたちづくるかの課題に直面させられたことになる。同誌のない手として登場した儀間進と伊礼孝の思索

に、その模索は全容をみせている。儀間の「受け継がれた負債——私たちの誤は何処にあつたか」(二巻三号)と、それへの補論というべき前掲の「前号のエッセイをめぐる」、および伊礼の「懐疽」の部分を設定し、撃て(筆名)いれい・たかし、(二巻八号)が、それにはかならない。

「受け継がれた負債」は、表題の示すように自己点検の文章である。「これまでの私たちの文学的歩みを反省するに当って、私はまず否定することから始めていきたい」との宣言をもつこのエッセイで、彼は、「目の前に浮ぶ諸先輩の面影を頑強に拒否し続け」ようとする。こう宣言することでみずからを励ましつつ、彼は、画期的とされてきた「五号から六号への転換」にメスをいれ、「(五号までの一引用者)デカダンスへの傾斜の度合がそのまゝ、その時、本土の文壇で提唱された『国民文学運動』にふり代つたのではないだろうか」と指摘する。

もとより儀間は、六号、七号での新川明と川満信一の仕事の画期性を認める。認めたらうで、「それはなばなしにも関らず、私たちの弱さは何であつたか？」にこだわりつつづけるのである。たぐりよせられた答えは、つぎのように書かれる。「自己を中心とする出発でなく他によりかゝつた『知識の習得』だけによる出発」、「こゝに於て、主体的処理の方法は放棄された」云々。

ここでの議論の趣旨は明瞭である。このエッセイの末尾の部分でみずからいうように、儀間は、「シツヨウなまでに私たちの主体性のなさについて繰り返し述べて」いる。あらゆる借り着をなげすめて、真理を「現実の中からまさぐり出してくる」ことを、彼は提唱しているのである。その趣旨にふさわ

しく、ここでの彼の文体は、勢いこんだ断定調からはほど遠く、一語一語、自分の言葉を探りだすように屈伸運動をくり返している。しかも主体形成へのこうしたこだわりは、彼が、「その当時の私たちにはナレイイがあった」といいきるとき、二重のものとなる。その「ナレイイ」にはおそらく、原則論の正しさにあぐらをかく意味でのそれと、危機感への埋没による傷口をなめあうようなそれとがあったであろう。それらを却けつつ儀間は、あらたな出発への基盤を造ろうとしたのである。^{*＊}

* それらの「ナレイイ」を示す光景を引いておく。前者の場合Ⅱ「僕達は、この原則論の上での正しさでもって、文学活動の上での多くのあやまりをカバーし、公然とこれを問題にすることを避けてきた」（池沢聡「琉大文学への疑問」に答える「二巻一号」、後者の場合Ⅱ「永久という言葉はわれわれ仲間の禁句であった。がしかし、仲間たちはいつもあやしげな危機感と、あたたかく抱き合って生活していた」（知念友男「状況の重み」、二巻九号）。

*＊ もっとも儀間のこの提言についての、新川や川満・岡本らの意見は、当時も現在もきびしい。当時の彼等の反応の一端は、新川の「文学者の『主体的出発』ということ——大城立裕氏らの批判に応える——」（『沖繩文学』第一巻第二号、一九五七年）に示されている。そこでの新川の反批判の要点は、批判者には、「火傷」を負わせたがわへの視点がなく、彼等が「自己批判をよそおった自虐趣味に溺れている」ことにあった。岡本恵徳は、その点をすこぶる明快に敷衍してくれた。それによると、儀間論文への彼等の反撥の根には、「儀間が、彼等のように政治活動をしてこなかったこと、〔儀間の「負債」論文の前身に、大城立裕「主体的な再出発を」、池田和「認識」「実感」「形象」という、外部からの二本の「琉大文学への批判」論文が載り、儀間論文は、それを承けてできたこと、〔そのわずかまえの「琉大文学」同人を含む退学処分という問題が、彼等にわだかまりとなっていたことがあった。もっとも彼等は、儀間のその後の「琉

球弧 沖繩文化の模索』（群出版、一九七九年）のような仕事には敬意を払っている。

繋がれた島の凝視という姿勢は、こうして自己の凝視へと向う。敗北・屈服の、外的条件ばかりでなく、内的条件をみつめようとするこの姿勢は、沖繩の民衆運動の質にまでメスをいれ、それと二重写しするかたちで、文学運動固有の未来をみとおそうとする。「ブライス勧告を契機にあれ程住民が立ち上ったのも沖繩であり、あれほど、あっけなくもろく崩れ去ったのも沖繩である。／＼一括払いに反対するの吾々であり、賛成するの吾々である（中略）。／＼今私はブライス勧告に破れた地点から沖繩を捉えなおす態度をもって沖繩文学を再出発させなければ沖繩の文学はいつまでも何処かの文学の亜流にしかないだろうと思っている」。

それでは、沖繩でのあるべき文学とはどのようなものか。迷ったあげく儀間は、こんな確信に到達する。「沖繩の現実」と、自分との関係、自分と文学との関係、文学と沖繩の現実との関係と云う（中略）三重の関係の悩みの中からこそ真に時代の重みを背負った、苦悩に満ちた、又は怒りに満ちた文学が生れる」。第一の関係のみに傾けば、政治主義へと奔るであろう。第二の関係のみに没入すれば、芸術至上の立場に閉じてもある結果を生むだろう。そうして第三の関係のみに集中すれば、大局的な文学論に終始することになるだろう。儀間は、それら三つの関係の緊張し平衡する地点に自己を置いて出発することを、提唱しているのである。

「基地の中にある町」といわれるK村居住の体験から説きおこした「『壊疽』の部分を設定し、撃

て」で、伊礼は、「基地は一つの村を完全にその属性として制度化し諦念と隷属の強要はやがて基地に同居する精神を強いる」と指摘し、精神のこうした腐蝕に抗する道はただ一つ、「甘美なヒューマニズムを完全に拒否する基地とは対極の線にある論理の構築にあるだけだ」といい放つ。そのためになにをなすべきかについて、彼は、『世界』一九五九年十一月号所載の、「世界の潮」5「パリの暗雲」（いれいの文章では、「フランスの暗雲」とある）のまえがきからヒントを得る。そこには、アルジュリアをかかえたフランスは、壊疽にむしばまれていても同然との趣旨の言葉があった。それを承けて彼は、みずからを国家にとつての「壊疽」たらしめようとするのである。「ぼくたちの内部にアルジュリアを設定し（中略）、それを拡大すること以外に、現代の（基地の中のかくちの）詩活動はない」、「支配者の肉体を機能停止させるための『壊疽』の菌を大いに生産し、放つことにより、沖繩における詩運動の新しい出発としたい」。

俄間の立場と伊礼の立場を同一視することは、もとよりできない。みずからを国家にとつての「壊疽」たらしめようとした伊礼は、政治的にはるかにラジカルである。にもかかわらず両者は、自己の凝視から主体の再構築へとめざす点で、共通分母でくくられるべき特質をもっていた。主体にこだわりの抜くことが、弾圧ないし敗北のあとの再出発にとつて、必須の作業との共通の認識が、生れてきているのである。

二巻三号所載の中里友豪「木遣歌の記憶」は、そうした認識あつてはじめてものされた創作ということが出来る。それは、疑いもなく新しい境地を拓こうとの意欲にみちた実験的な作品であつた。「琉球の第二黄金時代といわれる尚敬王の頃」に時代を設定したこの小説は、首里城改築の材木運搬のため、十五歳以上の男子への強制徴集令がだされたさいの、村のがわの対応を主題とする。最初の首里城建築のときは、すべての人が「ある誇り」をもって参加し、「今度御殿の御材木ひく、花の都へ、はじめてのぼる」と、よろこびを木遣歌に託したものだつたが、「彼らはやがて、それが自分らの生活に不安をもたらす苦行であることを知り、村ではその歌を嫌うようになっていった。そんな状況のもとでの徴集令であつた。

主人公のタラーは、徴集令がでた日、山に隠れる。「この村では、生きて家族を救いたいのなら山に隠れる、というのが一つの訓話にさえなっていた」。隠れ場所からは、向いの山の中腹にある「人捨て坂」がよくみえた。守礼の門改築のとき木を牽かされた人びとが、疲労困憊したあげく、背中に鞭をくらつて落ちていった難所である。作者は、その「人捨て坂」をみるタラーの気持をこう描写する。「クソッ」と思うのだが、ただそれだけだつた。何もすることは出来なかつた。なぜなら、上の者の権力が強いというからではなく、自分らの力が弱すぎるということを感じていたので。やがて隣村とのあいだに諍いがおきる。木を牽いてゆく道と指定された隣村の人びとが、「なにしろ木を運び出す時には作物が荒されるので」、こちらの村に変えてもらうようお願いでたのが、きつかけだつた。諍いは「喧嘩」とまでなる。こっそり村の様子をみにきていたタラーは、その「喧嘩」に

とびだして捕えられてしまう。そのうえ、「この村が木遣歌を嫌うということを知って、お上から道をこの村に変更する旨が公布され」る。人びとは、わが田に足をふみいれて木を牽かねばならぬ。ためらう人びとに鞭がとぶ。人夫として駆りだされたタラーは、反抗的態度ゆえにもっとも多く鞭をうける一人となり、ついに意を決して逃亡するのである。

だが、タラーのような人間ばかりではなかった。タラーの恋人チルの兄松金は、二人の仲を引き裂き、自分の野心のために、妹を地主の息子に嫁がせようとする。またタラーの人夫仲間のニョーはいう。「じたばたしたって、俺達を縛っている縄は緩みはしないよ。それよりその縄をちぎめさせないようによ領よく生きることだよ」。こうしてこの作品は、タラーを欠いたままつづく運搬作業の描写をもって締めくくられる。「朝になった。相変わらず鞭の音が響いた。重い歌声が比謝橋を渡った。何事もなかったように婉々と続く人の頭は疲れ切っていた。歌声は止絶えがちに響いた。まるで呻き声のように。それはすでに歌ではなかった。／首里天ざなしぬ よいしいよいしい／さーうざむくだやびる はいゆえ はーらーら／さーはりがよいし／さーあ いそーそそ／いひーひひ あは はは……」。

一九五〇年代後半という時点を背景として考えるとき、こうした筋立ては、吹き荒れた米軍による土地収用およびそれへの対応の心理と、あまりになまなましくオーヴァラップして受けとめられたであろう。人びとの喘ぎと呻きをもって終るこの作品は、こうして、沖繩の持続する苦難の根源を、

「上の者の権力が強い」ということだけでなく、ないしそれよりは、「自分らの力が弱すぎる」ことに求め、それゆえに新しい主体形成の必要性を問いかけていた。いかにつらくとも敗北を直視し、そうした敗北の内的条件をえぐりだすことによって、初めて真の再出発が可能になるという認識の、それは作品化にほかならなかった。^{*}

^{*} よく似た精神の境位は、真喜志康陽「傾斜地」(二巻七号)にも描かれている。ただこの作品にあっては、内なる汚辱をえぐりだそうとする姿勢と、再出発よりむしろ絶望に傾く姿勢とは、きわめて微妙な均衡にゆれているとの観がある。

「主体への回帰」というこうした特徴の出現は、『琉大文学』の歴史にとって、一つの時期の終焉であり新しい時期の開幕であった。

計三十三号にのぼる『琉大文学』の足跡からすれば、私はようやく、その三分の一強をたどりえたにすぎない。それが存続した年数からすれば、カヴァーしえた比率はさらに小さく、五分の一強にとどまる。しかも私は、対象とした号についても、少数の作品を採りあげたのみであり、さらにほとんどもっぱら文学思想史上の推移を追うに終始した。

とはいえ、『琉大文学』についてはいまだまとまった研究もないだけに、私としてはなによりもまず、一九五〇年代状況のなかで、文学活動というかたちで結集した一群の若者たちの思想的営為を、その

航跡にそくして辿ってみたかったのである。戦後沖繩の負の条件の只中から抽出されてきたその内実は、状況にたいして「否」といいつつ、真に創造的なものを求めての不断の出版から成っていた。そのことを確認するとともに私は、その後の『琉大文学』の基調についても、一瞥しておかなければならないだろう。

儀間進や伊礼孝のエッセーことに儀間のそれは、一見したところ、さまざまの「試行錯誤」(二巻三号の「編集後記」における儀間の言葉)をへて、ようやく打ちだされたところの、状況をトータルに引き受ける文学論との観を呈している。大きな課題を、この青年が提出したことは明らかである。それを追求してゆくとき、『琉大文学』は、「否」の文学としての新たな地平を拓くことになったであろう。

だが、文学面からいえば、そのように三重の関係のなかに文学の未来を見据えようとのこの論議は現実の状況のもとでは、政治への拒否反応の姿勢ないし非政治主義への傾斜と、紙一重の位置に立っていた。主体に固執する視点は、あらゆる夾雑物への嫌悪をとおして、他者から自己を切りはなし、孤立感の自己回転へと帰結する衝動をつよくもつ。そうしてそののちの『琉大文学』は、そうした孤立感の自己回転が二極分解しつつ進行したとの観を呈するのである。

一つの極は詩と評論の分野であって、清田政信がそれを代表する。彼は、「自己を凝視することでの情念のコミュニケーションに遭遇すること」を旗印としてかかげ、「日常の平準化にみあった安易なスローガン」ふうの作詩を唾棄することを宣言し(批評と自己表出、三巻六号)、「イメージに依る形象化」を

めざす詩と評論を多作する(座談会「沖繩の現実と創作方法の諸問題」、二巻六号)。それらを読むとき、主題における日常性の拒否、方法における具体性の拒否、理念における政治とのかわりの拒否が目立ち、そのような三つの拒否はそのまま、極限性の追求、象徴性の追求、文学の自律性の追求となっている。主体としての自己に固執するこの姿勢は、同人たちにつよい吸引力をもった。

いま一つは小説の分野であって、城原啓司「眩暈」(二巻一〇号)、田中有「屍港で」、池宮城秀一「出合いの時」(以上三巻三号)、譜久村勝男「断続した線」(三巻四号)、池宮城秀一「記憶の裁断」(三巻六号)などが、それを代表する。それらは、女性に安息を求める風景の諸相を描きたし、前者とは逆に、日常性・具体性への埋没を、いわば意志的に行なおうとする。その心理は、「眩暈」ではつぎのように描写される。「ぼくは常に眼を意識して生きている。現実を直視しようと努力すればするほど、背後に意識される得体の知れない眼はますます鋭さを加えてぼくから来る」、「それと同時にぼくは個性を喪い、小市民的な猫背の群像にまぎれ込んだのだ」、「ぼくは寿恵子を抱き、互いからみ合うとき、存在の証明を得た気がする」。

これら二つの路線は、実存的に生きかつ表現する途を求めた点で共通する要素をもちつつも、一方が極限性・象徴性へ、他方が日常性・具体性へと分化していったことをおおいがたい。状況と斬りむすんで倦まなかった当初の『琉大文学』の課題は、その意味では、いまでも十分に答えられないままにとどまっている。

本稿の作成に当っては、比嘉実氏・新川明氏・川満信一氏・岡本恵徳氏・儀間比呂志氏および琉球大学図書館の御高配をえた。つつしんでお礼申しあげる。